

## 日本語の述部における名詞の機能

新屋映子

桜美林大学

### Abstract:

Although Japanese is considered to be a verb-oriented language, while western languages are considered to be noun-oriented, there are a number of phenomena which suggests that Japanese is noun-oriented. The purpose of this paper is to explore whether Japanese is verb-oriented or noun-oriented by examining functions of Japanese nouns, especially those of nominal predicate.

In Chapter 1, after several remarks which claim that Japanese is verb-oriented are shown, an example of Japanese sentences in which a lot of nouns are used is introduced. Chapter 2 examines functions of Japanese nouns. In Chapter 3, the way how Japanese nouns work as predicate or in sentence final position is explored. Sentences which have a noun as predicate or in sentence final position are as follows.

1. typical nominal sentence
2. adjectival-like nominal sentence
3. verbal-like nominal sentence
4. pseudo-cleft sentence
5. *unagi* sentence
6. sentence which has no subject
7. sentence which has a sentence final noun
8. sentence which has a pseudo-noun in sentence final position

Chapter 4 examines frequency in use of a predicate noun. Finally, in Chapter 5, it is claimed that Japanese is noun-oriented in a sense that situation is seized and expressed as a noun, while western languages are noun-oriented in a sense that situation is seized and expressed with a noun as the central figure.

### 1. はじめに

日本語の特質が欧米の言語と比較して論じられるときに挙げられる概念の一つに、「動詞中心」「名詞中心」というのがある。欧米の言語は名詞を中心に文が構成されるのに対して、日本語は動詞を中心として文が構成されるというものである。

- ・「名詞構文は名詞中心に文章ができていて、ヨーロッパの言語には概してこの名詞構文法が優勢である。ところが、日本語は動詞構文が柱である。(略)名詞構文は、中心概念を名詞に託すが、動詞構文法では動詞にそれがあずけられるのである。」(外山 1973)
- ・「日本語の表現は場面・状況・気分が中心で、多分に静的・ムード的だから、

「勘」にたよる点が多く、それだけ芸術的だともいえるが、英語の表現は行動とその主体が中心になり、動的で、しかも論理的・具体的だともいえる。日本語と比べて、英語に「名詞構文」が多いのも上に述べたことと関係があるろう。(略)日本語で「節」や「副詞(形容詞)」で表現するところを、英語では抽象化して「名詞」で表現する傾向が強い。」(榎垣 1974)

- ・「西欧文は名詞を中心として展開して行く構造であるのに対して、日本文は用言を中心として展開して行く構造である、と言えよう。」(柳父 1979)
- ・「原文(日本語文:筆者注)のほうは、動詞を中心にして、情況全体をひとまとめに、できるだけそのまま捉えようとする表現になっているのにたいして、英文のほうでは(略)情況全体の中から名詞に相当するものを取り出し、そうして抽出した名詞と名詞との関係を、前置詞や動詞によって示す、という形で文章を構成している。」(E.G. サイデンステッカー・安西 1983) <sup>(1)</sup>

このように、欧米の言語は名詞中心、日本語は動詞中心ということを主張する論考は多い。確かに、(1)~(3)のような例を見る限り、こうした見方は納得のいくものである。

- (1) a. Five years in London had still left him in poor command of English.  
b. 五年もロンドンにいたのに、英語はさっぱりでした。(榎垣 1974)
- (2) a. Failure drove John to despair.  
b. 失敗して、ジョンは絶望した。(安藤 1986)
- (3) a. The long hours of unrelieved kneeling had so paralyzed his legs that he could pick himself up only with a special effort.  
b. 長い間端座の形を崩さずにいたので、努力しなければ立ちあがれなかった。  
(E.G. サイデンステッカー・安西 1983)

しかし、日本語が本当に動詞中心であるのかを疑わせる現象もある。下に示すのは日本のある私鉄の車内アナウンスである。少々長くなるが、筆者がそこで採取することのできた文のパターンを、すべて挙げてみることにする。(数字と下線は筆者。( )内には固有名詞が入る。)

①毎度(私鉄名)線のご利用ありがとうございます。②ご乗車の電車は各駅停車(駅名)行きでございます。③ご乗車の電車は(駅名)止まりです。④電車は10両編成での運転です。⑤(駅名)、(駅名)、(駅名)、(略)、終点(駅名)の順に停車をしております。⑥途中(駅名)は通過となります。⑦終点(駅名)到着は15時10分でございます。⑧(駅名)、(駅名)です。／次は(駅名)、(駅名)です。／間もなく(駅名)、(駅名)です。⑨お出口は左側です。⑩開く扉にご注意ください。⑪当駅で通過電車を待ちます。⑫2分ほどお待ちください。⑬お待たせいたしました。⑭間もなく発車いたします。⑮ホーム工事中ですので、ご注意ください。⑯この電車は(駅名)であとから参ります急行に追い抜かれます。⑰(私鉄名)線はお乗換えです。⑱お降りの際は足元にご注意ください。⑲(地名)方面においでの方はこちらでお降り下さい。⑳ただいま信号故障のため、運転を見合わせております。・お急ぎのところたいへんご迷惑さまです。・車内での携帯電話のご使用はほかのお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮ください。・乗り越し精算のお客様または特急券をお持ちでないお客様はただいまから乗務員がまいりますので、お申し付けください。・長らくのご乗車、ありがとうございます。・まもなく終点(駅名)に到着です。・どうぞお忘れ物などなさいませぬよう、お手回り品もう一度ご確認ください。・お忘れ物のないよう、今一度お確かめの上、お降りください。・次の発車は16時でございます。・ご乗車、お疲れ様でした。

一見して気が付くのは名詞(下線部)の多さである。なかでも目に付くのは、「ご利用」「ご乗車」「運転」「停車」「通過」「お待ち」「お乗換え」「お降り」のように動的概念が名詞で表わされていることである。漢語名詞が多く、また、「お～」「ご～」といった敬語形の名詞も多用されている。文の骨格は体言と用言で形成されるのであるから、名詞の多いのは異とするに足りないかもしれないが、上例の名詞の多さは、ジャンルの特異性を考慮に入れても、特筆すべきではないかと思われる<sup>(2)</sup>。

本稿は、上記資料に見られるような現象を契機として、「日本語は動詞中心」という通説を改めて検証し、日本語における名詞の機能を考察することを通して、日本語が通説に反して名詞中心とも言える性質を持つことを主張しようとするものである。

以下、第2章では日本語の名詞が文中でどのような機能を持つかを整理する。第3章では名詞述語文に焦点を当て、意味・統語構造を基準とする名詞文の類型化を試みる。4章では前章で考察した名詞文の各類型がどの程度用いられているかを資料によ

り調査する。5章で日本語における名詞の位置を考察し、結論とする。

## 2. 日本語における名詞の機能

日本語の名詞は、次のような機能を持つ。

### 2-1. 補語（主語、目的語、状況語）

「太郎が来た」「パンを食べる」「土曜日に行く」の「太郎」「パン」「土曜日」のように、格助詞を伴って、主語・目的語・状況語などの補語になる。補語になることは名詞の基本的かつ特有の普遍的な機能である。

### 2-2. 述語

「兄は大学生です。」の「大学生」のように、コピュラ（だ・である・です・でございます）を伴って述語になる。英語の名詞もコピュラ（be 動詞）を伴うので、日本語の名詞述語に似ているようであるが、日本語の「名詞+コピュラ」と英語の「be 動詞+名詞」とは異質である。“Yes, I am.”は、「はい、私はです。」とはならない。Be 動詞は動詞であるのに対し、日本語のコピュラは付属語だからである。話し言葉では「兄は大学生。」のように、コピュラを伴わず、名詞が単独で述語となる場合も多い。コピュラは用言形成詞とも言うべく、名詞を述語用言として機能させるものであるが、日本語の名詞はそれ自体、用言性を秘めていると言える。

### 2-3. 連体修飾語

名詞が名詞を修飾する時のかかわり方には、言語によって直接・間接の差がある。日本語は「太郎の本」「太郎という子」の「太郎」のように、名詞は「の」や「という」を介して他の名詞を修飾する。

### 2-4. 独立語

「太郎、こっちにおいで。」「あ、虹!」「松木村、ここで彼は生まれた」の「太郎」「虹」「松木村」のように、補語・修飾語・述語などのいずれにも属さない独立語になる。これも名詞の普遍的な機能である。

名詞の一種である形式名詞は、名詞句形成・連用句形成・述部形成の機能を持つ。

## 2-5. 名詞句形成

「散歩するのは楽しい。」「泥棒が逃げていくところを見た。」「私は行かないことに決めた。」の「の」「ところ」「こと」のように、用言句を名詞化する形式名詞がある。

## 2-6. 連用句形成

「資金が不足しているため、計画は中止となった。」「京都に行ったとき、彼に会った。」「受付で聞いたところ、演奏会は中止になったと言われた。」の「ため」「とき」「ところ」のように、用言句に下接して連用句を形成する形式名詞がある。

## 2-7. 述部形成

「彼も来るはずだ。」「だから彼がいるわけだ。」「今来たところだ。」の「はず」「わけ」「ところ」のように、用言に後接して述部を形成する形式名詞がある。

日本語の名詞が文において果たす機能は以上の通りであり、その用法は多岐にわたっている。

## 3. 日本語の名詞文の類型 ー述部における名詞使用ー

文は、何を基準にするかによって、さまざまに分類される。平叙文・疑問文・感嘆文・命令文という分け方は、表現意図による分類であり、単文・重文・複文というのは構造による分類である。述語の品詞を基準にして分類すると、名詞(述語)文・形容詞(述語)文・動詞(述語)文となる。日本語は述語を柱とする単肢言語であり、述部が文のかなめである。本章では、述部における名詞の働き (2-2、2-7) に焦点を当て、名詞の述語としての様態について考察する。

### 3-1. 典型的な名詞文

動詞は本来、時間的プロセスを持つ動きや変化を表し、形容詞は程度性を持つ性質や状態を表すのに対し、名詞は物の名を原型として、モノを表す品詞である。従って、典型的な名詞文は主語<sup>(3)</sup>を、時間に限定されず、程度性を持たない一定のモノとして述定する。(4)～(6)のように、主語を類別し、その本質を述べるのが、名詞述語本来の機能である<sup>(4)</sup>。

- (4) 大畑さんはこの道数十年のベテランですよ。(女)
- (5) これはすばらしいアイデアですよ！(女)
- (6) 秘書ってのは大変な職業なんだ。(女)

また、(7) における名詞述語は主語の名前を表し、(8) の名詞述語は主語を同定している。これらも名詞文らしい名詞文である。

- (7) (はじめまして。) 私は田中花子です。(5)
- (8) 「桑田伸子って誰だっけ？」 「桑田伸子、っていうのは、あのお茶くみの子だった！」(女)

このように「AはBだ」という典型的な名詞文における述語名詞句は、主語の類別・同定・名称提示を行なうものである(6)。

### 3-2. 形容詞的名詞文

述語名詞には、モノを表すだけでなく、性質・状態のような形容詞的な意味や、動作・変化のような動詞的な意味を表しているものがある。そうした述語名詞は、統語的にも動詞や形容詞と同じような振る舞いを見せる。名詞は体言であるから連体的な形式を受け、形容詞・動詞は用言であるから連用的な形式を受けるが、意味的に形容詞や動詞に近い述語名詞はしばしば連用的な形式を受ける。

- (9) 彼女はまだまだ子どもだ。
- (10) 彼女はとても金持ちだ。
- (11) 彼は太郎と友達だ。

(9)(10) の述語名詞はそれぞれ、連用成分である「まだまだ」「とても」という程度副詞に修飾され、(11) の述語名詞は「太郎と」という格成分を受けている。(9) の「子ども」、(10) の「金持ち」はここではモノを指示するのではなく、属性を表しており、「友達」も関係という形容詞的な意味で用いられているためであり、こうした名詞本来の意味からのずれが統語的な変容をもたらしている。このような述語名詞は名詞本来の機能である格成分にはならない(例(12)(13))。

- (12) \*あそこにまだまだ子どもがいる。

(13) \*太郎と友達が遊びに来た。

また、全く形容詞的な意味が名詞として顕現する例もある。(14)(15) は意味的には形容詞文であるにもかかわらず、「若さ」「暑さ」は統語的・形態的には名詞である。

(14) あなたの場合、社長としては異例の若さです。(女)

(15) 昨日はこの夏一番の暑さでした。

### 3-3. 動詞的名詞文

動詞的な意味が名詞で表される例も枚挙にいとまがない。

(16) 部長は明日から1週間ヨーロッパに出張です。

(17) 長男は海外に駐在で、次男は来年大学を卒業だ。三男は中3で、そろそろ受験なんだ。

(18) 社長は今在宅なんでしょう？

(19) 私たちはもう絶交だ。

(16)~(19) の述語名詞はいずれも動詞的な意味を持ち、格成分や連用修飾句を受けている。また、接頭辞を伴った(20)のようなものも意味的には動詞(ないし形容詞)でありながら、連体形は「大混雑の(車内)」であるから形態的には名詞である。

(20) 車内は大混雑／大混乱／大騒動だった。

名詞がこのように動詞的用法を持つのは漢語であることが影響しているであろう。

(21) のように、見出し語的な簡潔な表現には漢語が活躍する。

(21) 「短大をこの春卒業。即家事見習。即結婚。」「やむなく就職。」(女)

しかし、動詞的な述語名詞は漢語に限らない(例(22)~(24))。

(22) お前みたいな下っぱはまず人員整理でどうせクビだ。(女)

(23) 旅行は当分お預けだ。

(24) 彼はあれ以来だんまりだ。

尊敬語が (25)~(29) のように「接頭辞「お」／「ご」＋動詞連用形＋コピュラ」という名詞述語形式を取るのは日常的な現象である<sup>(7)</sup>。

- (25) 約束をお忘れですか？(女)
- (26) 尾島さんは今日もお休みですよ、社長。(女)
- (27) あなたは絶対安全な場所をお望みなんでしょう？(女)
- (28) お子様たち、大きくおなりですね。
- (29) 注文の品はお決まりですか。

「お持ちだ」「お呼びだ」「おいでだ」「お悩みだ」「お困りだ」「お疲れだ」など、こうした形式の多くは動詞のテイル形に代わるものであるが、そればかりではない(例 (30)~(32) )

- (30) 明日は何時にお発ちですか。
- (31) (間違い電話で) どちらにおかけですか。
- (32) どちらへお出かけですか。

「～がち」「～ぎみ」「(炊き) たて」「～っきり」「～っぱなし」「～寸前」「～過ぎ」などの接尾辞を伴って助動詞や副詞的な意味を加味したのも、品詞的には名詞に分類される(例 (33)~(36) )。

- (33) 私はそのことをついに言い出せずじまいだった。
- (34) 彼らはもう餓死寸前だ。
- (35) 彼はお金を使い過ぎだよ。
- (36) 妻は夫の私に家事を任せっきりだ。

以上のような動詞的な述語名詞は通常、名詞本来の機能である格成分になりにくい。また、動詞的ではあるが、動詞の特徴であるヴォイス、アスペクト、意志性、などは捨象された表現である。

### 3-4. 擬似分裂文<sup>(8)</sup>

- (37) 一人平気な顔をしていたのは純子だけであった。(女)
- (38) 社長はこの私ですよ。(女)

(39) びっくりしたのはこっちよ！(女)

(37)～(39) は、事象を構成する要素のあるものを焦点として特にそれと指定するという表現機能を持つ、いわゆる擬似分裂文であり、焦点となる格成分が述語名詞句となるものである<sup>(9)</sup>。擬似分裂文として表現されるか否かは文脈の情報構造に依存する。

### 3-5. 有主語文脈依存文（ウナギ文）

(40) 君は卒業旅行、どこにする？　－俺はアメリカだ。

(41) 私の姉は今ダンスに夢中なんです。　－私の姉はゴルフよ。

(42) この頃腰が痛くて。　－私は肩なんです。

(40)～(42) はいわゆるウナギ文である。これらは主語に関して伝えるべき情報の焦点が述語名詞句の指示対象であることを示すのみで、主語と述語の意味関係は文脈に依存している。どのような文もその解釈は多かれ少なかれ文脈に依存するが、主語と焦点を結び付けただけのウナギ文は、構造的に文脈依存的であり、自明の情報を省いた効率的な表現形式である。

### 3-6. 無主語文

(43) 尾島さんからお電話です。(女)

(44) 会社が潰れるかどうかのせとぎわだ。(女)

(45) そこへ、この降ってわいたような騒ぎである。(女)

(46) たいへんだ。また中東で戦争だ。

(47) もう5時だ。

(48) あ、雨だ。

(43)～(48) は、本来、主語を持たない文である。無主語文の中には、(49)～(53) のように、述語名詞句を構成する連体部と被修飾名詞が述語と主語のような意味関係にあるものも多く、述語が主語的な成分を含んでいるとも言える。

(49) 冷たい母親ねえ。(女)

≡この母親は冷たいわねえ。

(50) いいお天気ですね。

≡お天気がいいですね。



3-8. 「形式名詞（+コピュラ）」で終わる文<sup>(11)</sup>

「つもり」「はず」「ところ」「わけ」「もの」「こと」「の」などの形式名詞は文末で助動詞的な機能を担う（例 (59)～(62)）。同様の言語形式を持つ言語は日本語に限らないが、日本語は特に命題を括る位置に用いられるこうした形式名詞を分化・発達させている。

(59) 私をからかうおつもりですか？(女)

(60) 君も家を建てる時には良心を黙らせていたはずだな。(女)

(61) 会社は社長一人で動くものではない。(女)

(62) 人は一人では生きられないのだ。

(63) の「の」は通常終助詞とされるが、これも本来上接部分を名詞化する形式名詞である。

(63) どこにいるの？

以上、意味・統語構造を基準として名詞文を類型化した。日本語の名詞は、名詞としては二次的な機能である述部における用法を多岐に発達させていることが分かる。

## 4. 名詞文の使用度

名詞文は文章・談話の中でどの程度用いられているであろうか。赤川次郎の小説『女社長に乾杯!』第1章における名詞文の使用度を調査したところ、表1のような結果が得られた<sup>(12)</sup>。

表1	会話文		地の文	
	総数	比率	総数	比率
総数	666	100%	424	100%
A. 典型的・形容詞的・動詞的名詞文	58	8.7%	48	11.3%
B. 分裂文、ウナギ文、無主語文	75	11.3%	27	6.4%
C. 文末名詞文	11	1.7%	6	1.4%
計 (A+B+C)	144	21.6%	81	19.1%

述語の品詞の約2割を、述語を第一の機能とはしていない名詞が占めていることが分かる。会話文と地の文とで、名詞文の文総数に対する比率に大差はないが、会話

文には分裂文・ウナギ文・無主語文などの文脈依存型が多く、地の文には基本的な構造の名詞文が多い<sup>(13)</sup>。以上のほか、名詞文とは言えないが、会話には、「話って?」「あと十分!」「熱いコーヒー!」「どうでしょ、この態度!」「あのもうろく爺め!」のように、名詞ないし名詞が助詞を伴った形で終わるものが多い。また、会話文・地の文に限らず、「尾島産業は一種の空白状態にあるのだ。」「電話がありましたよ。」「人員整理はあるんでしょうか?」「後の生活がありますから。」「いつも疲れた印象がある。」「あんな小娘がやれっこないんですよ。」「節約になる。」「人事が大幅に異動になった。」のように、名詞に形式的な動詞が下接した疑似名詞文とも言うべき多くの表現形式がある。さらに、「～ことがある/ない」「～ことができる」「～ことこの上ない」「ことにする」「ことになる」「～ないことには(始まら)ない」「ことはない」「～ことうけあいだ」「(見るべき)ものがある」「～ものと思う」「ものとする」「～方がいい」「はずがない」「わけにはいかない」などなどは、形式名詞を核とした合成的な形式が助動詞相当の機能を担って述部を構成するものである。ちなみにこれらの使用数を調べると以下の通りであった。表1のA～Cと併せると、会話文で36.9%、地の文で28.5%の使用率に上る。

	会話文		地の文	
	数	割合	数	割合
D. 名詞 (+助詞)	69	10.4%	3	0.7%
E. 名詞+形式的動詞	33	5.0%	37	8.7%
計 (A+B+C+D+E)	246	36.9%	121	28.5%

このほか、形式名詞を含む「のだ」「わけだ」などが、しばしば主述語に下接する。中でも圧倒的に使用度数の多いのは「のだ」である。

		会話文		地の文	
		数	割合	数	割合
F. 「形式名詞 (+ダ)」 で終わる文	ノダ以外	37	5.6%	28	6.6%
	ノダ	132	19.8%	33	7.8%
計 (F)		169	25.4%	61	14.4%

メイナード (1993) は、日本人20組、計60分の日常会話 (文総数1244) に見られる

文末表現を調査し、次のような結果を報告している（数字は％）。

- ①終助詞：35.05 ②体言止め：16.40 ③「じゃない」「でしょ（う）」などの助動詞：9.73 ④動詞現在形：8.28 ⑤動詞の「ーて形」：7.48 ⑥接続詞：5.63 ⑦副詞句：5.55 ⑧格助詞：3.78 ⑨動詞過去形：3.70 ⑩言いよどみの類：3.38 ⑪「わけ」「もの」などの形式名詞：1.05

本稿とは分類基準を異にしてはいるが、メイナード (1993) の結果によると動詞の現在形・テ形・過去形の合計が19.46％であるのに対し、体言止め・格助詞・形式名詞の合計は 21.23％であり、文末部分に名詞が多く用いられていることが分かる<sup>(14)</sup>。

### 5. 名詞中心か動詞中心か

従来言われている名詞中心的とは、有生無生にかかわらず名詞を主語として立て、事態を他動詞的に表現する言語のことであり、動詞中心的と言われているのは、事態を自然に出来したかのように自動詞的に表現する言語のことである。「名詞中心」の「名詞」とは主語名詞、「動詞中心」の「動詞」とは述語用言のことにほかならない。名詞中心的言語は、意志の関与がなくても事態を‘行為’として表現したが、日本語は意志的行為であっても無意志的な‘出来’として表現したが。名詞中心言語は他動詞的、能動的、意志的、モノ志向的、論理的であり、動詞中心の日本語は自動詞的、受動的、無意志的、コト志向的、情緒的、という表現傾向を持つ。前者はスル言語、後者はナル言語とも言われる<sup>(15)</sup>。名詞中心か動詞中心かというのは、こうした種々の対立する概念に相関しているのである。まとめると表4のようになる。

表4

名詞中心	主語中心	スル言語	他動詞的	能動的	意志的	HAVE/DO/持ツ言語	モノ(個体)指向的	行為としての表現	論理的	主語優先言語
動詞中心	述語中心	ナル言語	自動詞的	受動的	無意志的	BE/アル言語 <sup>(16)</sup>	コト(状況)指向的	出来としての表現	情緒的	主題優先言語 <sup>(17)</sup>

こうした対立する図式の中で日本語は動詞中心型とされ、日本語における名詞の機能に焦点を当てられることはあまりなかった。しかし本稿で明らかになったように、日本語の名詞は文構成に重要な機能を果たしている。名詞は補語・述語・連体修飾語・

独立語という文成分になることをはじめとして、名詞句・連用句・述部の形成に関わる。述部だけに関して言えば、意味的・統語的には形容詞的ないし動詞的でありながら、名詞の形で表現されることが多く、また、文脈の情報構造に連動して名詞が擬似分裂文やウナギ文の述語となる。対峙する主語を持たない名詞述語も少なくない。論理的な主語を含む名詞述語もある。実質的な意味を持ちながら助動詞的に働く文末名詞もあれば、助動詞とされる一群の形式名詞もある。動詞中心と言われる日本語の動詞＝述語の中には名詞が結構な割合を占めているのである。名詞の使用度調査でもこのことは裏付けられた。

日本語では動きも名詞で表現され (3-3)、事態そのものも名詞のみで表現される (3-6)。文末名詞文においては、命題事態が、種類・属性・様態・主観などの、事態のある側面を表す一つの名詞に収斂される (3-7)。「はずだ」「わけだ」などにおける形式名詞は文末名詞がさらに抽象化したものである (3-8)。特に、文を名詞化する形式にほかならない「のだ」の頻用は日本語の大きな特徴と言える<sup>(18)</sup>。このように名詞が、名詞句はもとより、連用句や文自体を形成するものとして働くということは、命題が名詞として統括されるということである。欧米型言語が名詞を核として主語と述語の関係を明確にするという意味で名詞中心言語であるとするならば、日本語は事態そのものを名詞的に把握し、表現するという意味で、名詞中心言語であると言える。

## 6. 終わりに

日本語は述語を中心に展開する動詞中心言語であると言われるが、本稿は別の角度から、日本語が名詞中心的であり、事態を名詞的に把握する言語であることを述べた。「山路来てなにやらゆかしすみれ草」のような、日本文学を代表するジャンルである俳句は、事態を名詞的にではなく名詞で把握する芸術である。波多野完治 (1953) は、「名詞的表現を多く使う方が文章は緊密になり、名詞のみの文章は、適当に言葉を選ばれたならば、簡潔な措辞のうちに著しい生氣をもることができる」と述べ、『言語学大辞典』は「ある現象を時間的に変化する動的現象として表現するより、空間的な表象、静的・瞬間的な視覚として捉える印象的な文体において、名詞構文がしばしば用いられる。」と述べている (p.1329)。いわゆるウナギ文も、文脈上自明の要素は捨象して名詞と名詞のみを結合する俳句のような文である。動詞で述べられるべきものが名詞に依託されると同時に動詞の持つヴォイスやアスペクトなどのカテゴリー

も消滅する。尊敬語化された述語がしばしば名詞化するのは、古来、事態をぼかすことが敬意表現の一つであったことと関係があるかもしれない。日本語における名詞的把握は深いところで文化とつながっている。

#### 注

1. 森田 (1985) は形容詞と動詞を対比しているが、日本語を動詞的としている点では変わらない。「日本語では形容詞によるとらえ方と動詞によるとらえ方が対立していて、「近い」のような客観形容詞による状態的な表現はよほど普遍的な事柄でないかぎり用いない。移り行くもろもろの現象を、その現象の生起として動詞的に発想していく。動詞型言語と言ってもいいくらいこれは特徴的である。」(p.106)
2. ⑭の「登車 (いたします)」はサ変動詞の語幹とすべきであるが、それ自体名詞として独立し得るものである。
3. 「A(名詞句)はB(名詞句)だ」というのが名詞文の基本的な文型である。主語は通常「これは今使っている教科書です。」「鯨は哺乳類だ。」のように主題化しており、文脈から明らかであれば省略されることが多い。本稿では主語が主題化している場合もすべて「主語」と表示している。
4. 佐藤里美 (2001) は典型的な名詞文について詳しく論じている。
5. 初級の日本語教室で行なう「これは鉛筆です。」「それは本です。」という文型練習は、日本語での名称を提示するもので、主語を類別するものではない。「これは日本語でエンピツです。」「これは日本語でホンです。」と言っているのである。
6. ただし、文における述語名詞の機能は必ずしも単一ではない。例えば「あの人は誰？」は主語の類別を要求しているのか、名前を聞いているのか、同定を要求しているのか定かではない。あるいはそれらの複合的なものかもしれない。「うちの社長だ。」「田中太郎さんだ。」「ほら、この間新宿で会った人じゃないか。」など、さまざまな答えが想定できるであろう。
7. 「ご主人、相変わらずご多忙のようね。」の「ご多忙」のように、形容詞に接頭辞がついて名詞に転成するものもある。
8. 指定文ともよばれる。
9. 擬似分裂文には、知的意味を同じくし、形態を異にする「太郎がこの花を買ってきたのです。」のような文がある。
10. メイナード (2000) は「感嘆的独立名詞句」について考察している。
11. これらはいわゆる名詞文とよばれるものではない。
12. 文は「。」「!」「?」などの表記に基づいて認定した。

13. 会話文に比べ地の文には動詞的名詞文が比較的多く見られた(会話文: 3例、地の文: 12例)。これは、地の文が過程性を持つストーリーを語ることと関係があるであろう。
14. 国立国語研究所「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース ver.2 (2001)」に収められている日本語作文の調査でも、中国語話者の全文中の名詞使用率が11%、日本人大学生の使用率が約18%となっており、やはり日本人の名詞使用率の方が高くなっている。
15. 池上嘉彦 (1981)
16. 名詞中心か動詞中心かは、存在文に‘This room has two windows.’のように‘have’を用いる表現パターンと、‘There are two windows in this room.’のように‘be’を用いる表現パターンのどちらが選ばれるかにも関連する。日本語は「この部屋は2つの窓を持つ。」よりも「この部屋には窓が2つある。」が一般的であるから、be 言語ということになる。
17. 名詞中心か動詞中心かは、構文上主語を必須とするか、あるいは主語は必ずしも必須ではなく主題を持つ題述構文を頻用するか、すなわち、主語言語か主題言語かという相違にもつながっている。
18. 新屋・山崎 (2002) は中国人の日本語作文と日本人の日本語作文を比較して、前者には学習時間の多寡にかかわらず「のだ」がほとんど用いられていないのに対し、後者には非常に多くの「のだ」が使用されていることを報告し、そこに母語の影響が見られることを論じた。またメイナード1997は、エッセー24篇(文総数1109)を調査し、44.09%の文に「の」「こと」による名詞化が見られると述べている。

## 資料

女(略称): 赤川次郎『女社長に乾杯!』新潮文庫(CD-ROM)

## 参考文献

- 安藤貞雄 (1986)『英語の論理・日本語の論理』大修館書店  
池上嘉彦 (1981)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店  
煤垣実 (1974)「比較言語学的にみた日本語と英語」『復刻文化庁国語シリーズ V 外国語と日本語』教育出版  
亀井孝、河野六郎、千野栄一編著 (1995)『言語学大辞典 術語編』三省堂  
金田一春彦 (1957)『日本語』岩波新書  
E.G.サイデンステッカー・安西徹雄 (1983)『日本文の翻訳』スタンダード英語講座2 大修館書店  
佐藤里美 (2001)「テキストにおける名詞述語文の機能—小説の地の文における質・特性表現と<説明>—」『ことばの科学10』むぎ書房  
新屋映子 (1989)「“文末名詞”について」『国語学』159集

- 新屋映子・山崎恵 (2002) 「中国人学習者における「のだ」の使用に関する研究 — 中国人の作文と日本人の作文を比較して—」東アジア日本語教育シンポジウム
- 外山滋比古 (1973) 『日本語の論理』中公文庫
- 波多野完治 (1953) 『文章心理学入門』新潮文庫
- 泉子・K・メイナード (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 泉子・K・メイナード (1997) 『談話分析の可能性』くろしお出版
- 泉子・K・メイナード (2000) 『情意の言語学「場交渉論」と日本語表現のパトス』くろしお出版
- 森田良行 (1985) 『誤用文の分析と研究』明治書院
- 柳父章 (1979) 『比較日本語論』日本翻訳家養成センター